

「ふたりのままではいけない」

肩に食い込むギターケースの重さを感じながら、スタジオの前に立っていた。

ギターを背負うのは久しぶりで、背中に当たる硬い感触が、昔のライブの記憶を静かに呼び起す。

季節は六月で、雨の降る日が続いていた。週の半ばから降り始めた雨は、土曜日の今日もまだ降っていて、街中が雨の匂いで満たされていた。

傘を閉じ、レンタルライブスタジオの軒下に移動する。

約束の時間から少し遅れて、玲子がやってくる。手には大きな引越しのバッグを持っている。取っ手の部分が少しほつれていて、そこに彼女の生活の重さが滲んでいるみたいだ。

「……久しぶり」

玲子がそう言って、ぎこちなく笑う。

最後に会ったのは、バンドを解散すると決めた日のことだ。

あの日、私たちは恋人であることもやめた。

音楽を続けたい私と、普通の生活を選びたい彼女。未来が重ならないと悟ってから、二人の関係は静かにほじめていった。

「引越し、今日だったの？」

「うん。明日から新しい営業所だから。荷物、全部持ってきてやった」

玲子がバッグを少し持ち上げて見せる。

「引越しの荷物にしては、少なくない？」

「そりやそうよ。大きな荷物は宅配便で送っちゃったし。これは身の回りの物だけ」

「それもそっか」

音楽を続けるための機材ではなく、生活のための荷物。私の荷物との違いが、二人の未来が交わらないことを示していた。

「そっちは……ギター？」

「うん。久しぶりに弾くから、ちょっと不安で」

「スタジオのを借りたら良かったのに」

「私、これじゃないと弾けないから」

「そんなわけないでしょ。わたしが知ってる難は、そんなレベルのギタリストじゃないよ」

その言葉に、胸の奥がざわついた。

彼女はいつも、私のギターを褒めてくれた。その声に支えられて、私は何度でもステージに立った。

「じゃ、入ろっか」

スタジオの扉を開けると、懐かしい匂いがした。木材と機材の混じった、少し乾いた空気。

何度もここで夜を明かした。

何度もここで喧嘩した。

何度もここで、彼女の声に恋をした。

彼女はバッグを隅に置き、私はギターケースを開く。そっと弦を撫で、ペグを回して音を合わせ

る。

「……まだ鳴るかな」

弦を弾くと、乾いた音がスタジオに広がる。音が、ほんのわずか迷っているように聞こえた。

「……ずれてるね」

しばらく触らずにいたことで、弦は湿気を吸って張力を失っていた。

まるで、私たちの関係みたいだなと思う。触れない時間が長すぎて、少しずつ歯車が狂っていったように。

ペグを回し、音を探るようにもう一度弾いた。今度は別の弦が、わずかに上ずった。スタジオの壁がその不安定な響きを受け止める。

「でも、まだ鳴るよ」

玲子の弦きに背中を押されて、私はゆっくりとコードを鳴らした。三弦をもう一度弾き、微調整する。今度は、スタジオの壁が柔らかに震えた。

濁りが消え、音がひとつにまとまる。その響きは、昔のライブ前に二人で合わせた音と同じだった。

「……戻った」

「いい音じゃん」

彼女が笑う。それは、緊張と期待が混じった、ライブの前によく聞いた声だった。

「……合わせてみる？」

「そうだね」

「今日録る曲、決めてるの」と彼女が言った。

「もちろん。あれしかないでしょ」

二人で初めて作った曲。ライブで何度も披露した曲。レーベルから声をかけられて、メジャーデビューの足掛かりとなった曲。

意見が相容れなかったときも、くだらない喧嘩をしたときも、この曲を披露するときだけは、二人の音が奇跡みたいに合ったんだ。

「じゃあ、軽く合わせてみようか」

ヘッドホンをつけると、彼女の息遣いが耳元で感じられる。マイク越しの声は、昔より少し低くなったようだ。

仕事のストレスか、境遇の変化か、理由はわからない。

でも、その変化が妙に愛おしく思えてしまった。

「いくよ」

彼女がカウントを取る。

ギターのアルペジオがスタジオに広がると、その音に合わせて玲子が声を重ねた。

——ああ、やっぱり。

二人の音は、今でも奇跡みたいに合っていた。

ハモリが重なる瞬間、胸が締め付けられる。音楽を続けたい気持ちだが、喉の奥で疼いた。でも、彼女はもう音楽を選ばない。

選べない。

選はないことを選んだから。

「……いいね。まだ合うね、私たち」

彼女が照れたように笑う。

その笑顔を見た瞬間、私は今日が最後の録音になると思い出す。

この曲を録り終えたら、もう二人で歌うことはない。

「じゃあ、本番いこうか」

録音が始まる。

何度もテイクを重ねる。

そのたびに、彼女の声が私の心を揺らす。

歌詞の一行一行が、過去の記憶を呼び起こす。

ライブハウスの熱気。

深夜の帰り道。

初めて手を繋いだ日。

初めてキスをした日。

初めて喧嘩した日。

そして、最後に泣きながら別れた日。

「ふたりのままではいられない」

あの頃、私たちを繋いでいた曲を。

ねえ あの日の声を

まだ覚えているよ

未来なんて知らないまま

ただ重ねたハモリ

君の指が震えて

私の手を探した

あの瞬間だけは

世界が味方だった

二十代の前半から、二人でここまで来た。玲子がギターを弾き、私は歌詞を書いて歌う。渋谷の小さなライブハウスで初めて会った日、ステージの端で弾いていた彼女のギターの音に、胸がざわついたのを今でも覚えている。

「一緒に曲、作りませんか？」

その声をかけた日から、二人でデモを何十本も作り、ライブを重ねた。

夢を選べたなら

傷つけずに済んだのかな

君の隣にいるほど

私は弱くなる

インディーズで出した二枚目のEPがバズった頃、私たちは本気で夢を見ていた。
ライブハウスの熱気、SNSの拡散、知らない誰かが私たちの曲を口ずさんでいる動画。
あの時の私は、彼女とならどこまでも行けると思っていた。

ふたりのままではいられない

愛したままじゃ進めない

声が重なるほど

未来が遠くなる

それでも最後の夜だけは

嘘をついて歌いたい

君と私の音が

まだ消えないように

レーベルの会議室に呼ばれた日のことを、今でも鮮明に覚えている。

テーブルの真ん中に契約書が置かれていて、担当者は満面の笑みを浮かべていた。

「君たち、すごくいい。すごくいいよ。だけど……」

彼の言葉を聞いた瞬間、世界が崩れ落ちるような気がした。

玲子が私の手を握る。彼女の指先を握り返しながら、心中で一つの答えを固めていた。

選ばなかった未来が

胸の奥で泣いている

君の笑顔を守るために

手を離したんだよ

「……もう一回、いける。」

「うん」

もちろん、何度でも。

玲子は少しだけ目を赤くしていた。私もきつと同じだった。

音楽は、私たちを結びつけて、そして、私たちを壊した。

愛しているのに、同じ未来を選べなかった。

ふたりのままではいられない

愛したままじゃ届かない

君の声が響くたび

心が軋むけれど

最後の曲が終わるまで

どうかそばにいてほしい

別れの音が

優しく鳴るように

最後のテイクが終わると、スタジオの空気が変わる。

雨音だけが響いていた。録音機材のランプが静かに点滅している。

二人の声が重なった音が、モニターから流れた。

「……すごいね。こんなに綺麗に重なるんだ」

「うん。最後にしては、出来すぎだよ」

彼女は笑ったが、その目は泣きそうだった。私もきっと同じだった。

ギターのチューニングをしながら、玲子に声をかける。何かを話さないと、いけない気がして。指先に触れた弦の冷たさが、さっきまで二人で奏でていた温度と実に対照的だ。

「そういえばさ、最近やたら流行ってる曲あるじゃん。T i k T o kでみんな踊ってるやつ」

「ああ、あれね。職場の子たちがずっと歌ってるよ。サビだけ異常に耳に残るやつ」

「そうそう。あれ、コード進行めちゃくちゃシンプルなんだよね。たぶん、ギター触ったことある人なら誰でも弾ける」

「でも、ああいうのが売れるんだよね。なんか……時代って感じ」

他愛のない会話。

けれどその一つ一つが、胸の奥にじんわりと染みていく。

「私たちも、ああいう曲作れたらよかったのかな」

「いや、私たちはそんな柄じゃないでしょ。流行りに合わせるより、自分たちの好きな音をやりた
いって、ずっと玲子言ってたじゃん」

「……そうだったね」

無理やり笑ったみたいな顔で、彼女が小さく頷いた。

「ねえ、雛」

「うん？」

「もし、わたしが音楽続けたいって言ったら……どうしてた？」

「……たぶん、嬉しかった。でも、あなたは続けないでしょ」

「うん。続けられない。あなたの隣にいと、夢を見なくなるから」

その言葉は、優しさと痛みが混じっていた。

彼女は私の夢を奪いたくなかった。

私は彼女の未来を縛りたくなかった。

だから別れた。

だから今日が最後。

「元気でね」

「うん。雛も」

あの日、レーベルの担当者はこう続けた。

「二人でやるなら、契約は難しい。片方ならすぐにでも動ける」
彼女は私を見た。

その目は、迷いと恐れと、私への愛でゆれていた。
私の胸の奥では、いくつもの葛藤が渦巻いていた。

——もし彼女だけが選ばれたら？

——もし私だけが選ばれたら？

——その未来で、私たちは恋人でいられるのか？

「二人でやるから意味があるんです」

彼女はきつぱりとそう宣言した。それは、事実上の決別だった。
本当は、どこかでわかっていた。

彼女の声のほう売れる。彼女のほうがスターになれる。

ギターの腕は平凡で、コーラスを被せるだけの私は彼女のお荷物になると。
でも、彼女は私を置いていく未来を選ばなかった。

——私たちは契約を断った。

会議室を出た瞬間、彼女は泣きながら笑った。

「ずっと一緒にいようね」と。

その時は、本気でそう思った。

二人で選んだ未来が、何よりも尊いものだと思っていた。
でも——。

時間が経つほど、その選択は重くなっていった。それから、私たちの曲は売れなくなっていく。
SNSでも注目されなくなつて、バンドを解散することにした。就職を選んだ玲子と、働きながら、
時々ギターを弾いていた私。道を違えてから、罪悪感が強くなった。

——私があなたの夢を壊したんじゃないか。

——私があなたを普通の生活に縛りつけたんじゃないか。

言葉が棘となつて、私の胸を抉っていた。

彼女の歌声を聞いた時、その棘は少しずつ深く刺さっていくのだった。

あの会議室で握り合った手の感触が蘇って、胸の奥でかすかに痛む。

私たちは、あの日すでに未来を違えていたのかもしれない。

道ははっきり見えていて、後悔するとわかっていても、それでも手を離さなかった。
だから、そこが私たちの限界になった。

「雨が止んだら、駅に向かうよ」

「……うん」

全面ガラス張りのライブスタジオから望んだ空は、少しずつ明るくなっていた。

このガラス張りの小さな箱庭が、今だけは私たちの城だった。

このまま雨が止まなければいいのにと、叶うはずのない夢を願う。